

「死」に至る手続き・ドラマツルギーの問題

——岸田國士論③——

松尾忠雄

一 はじめに

作品の中の話題にせよ、「死」がかなり、あるいは大きく登場してゐるのは、「岸田國士全集 第一巻、第二巻戯曲篇」(新潮社 昭和二九年刊)によれば、以下の作品である。

- | | |
|-----------|------------------|
| 命を弄ぶ男ふたり | (大正一四年 新小説 二月号) |
| 麵麴屋文六の思案 | (大正一五年 文藝春秋 三月号) |
| 遂に「知らぬ」文六 | (昭和二年 週刊朝日新年特別号) |
| 落葉日記 | (昭和二年 中央公論 四月号) |
| 動員挿話 | (昭和二年 太陽 七月号) |

空の赤きを見て (昭和二年 婦女界 一二月号)

醫術の進歩 (昭和八年 中央公論 新年号)

クロニック・モノロゲ (昭和八年 文藝春秋 新年号)

それ以後の作品には戦後の作品も含めて「死」を扱った作品はない。

「命を弄ぶ男ふたり」は、その題名のとおり、死ぬこと「自殺」を競う知的遊戯であり、岸田という新しい知性の登場を印象づけた作品であった。この作品は、「紙風船」と並んで現在でも上演する価値のある数少ない作品である。「麵麴屋文六の思案」は、彗星が地球に衝突して人類が絶滅するというデマに右往左往する人間の姿をファルス風に描いた作品である。「遂

に『知らぬ』文六』では、彗星、地球衝突前夜の極限状況の人間の姿を、これまたファルス風に描き「文六」は「亡者」になつたりする。何れも「死」をファルス風に取り扱っている。

登場人物が死ぬのは、『落葉日記』『動員挿話』『空の赤きを見て』『醫術の進歩』『クロニック・モノロゲ』の五作品である。この中で、『醫術の進歩』『クロニック・モノロゲ』の二作品は、「死」そのものがテーマというよりは、岸田が言おうとしていることさらに「死」の問題が利用されている、と言つてしまえば語弊があるが、「死」という問題をめぐつて登場人物が自己の立場、自己の感情を表述するところにドラマが成立するという作品になっている。

ここでは、登場人物が死ぬ『落葉日記』『動員挿話』『空の赤きを見て』の三作品のうち、『落葉日記』『動員挿話』の二作品について、その登場人物が「死」に至る作者の手続き、つまりドラマツルギーについて論述し、さらに関連する諸問題を検証してみたい。

二 二作品の概観、比較

『落葉日記』『動員挿話』『空の赤きを見て』の三作品は、い

ずれも昭和二年に成立している。尤も、『落葉日記』の第一幕は、前年初頭（大正一五年）に「第一幕」という題で文藝春秋に発表されている。また、昭和十一年六月から昭和十二年五月まで、小説『落葉日記』を『婦人公論』に連載している。小説『落葉日記』は、戯曲『落葉日記』の続編とも言える作品であるという。尤も、そこには、時代が色濃く影を落としているようだ。

登場人物が「死に至る」、後の二作品『醫術の進歩』『クロニック・モノロゲ』は、いずれも昭和八年に成立している。

前記三作品の中で、度々上演されているのは、『動員挿話』である。昭和五年までに、屢々上演されている。人気作品であったようだ。『岸田國士全集』（新潮社刊）の記録によれば、それ以後には全く上演されていない。このことにも時代が陰を落としていたのであろうか。他の二作品には上演記録がない。

『落葉日記』と『動員挿話』には、「予期しない死」が描かれている。一方、『空の赤きを見て』の「死」は始めから予期されている「死」である。

まず『落葉日記』について。

この作品には二人の「予期しない死」がある。收と老婦人の「死」である。いずれの「死」も舞台の上では直接に描かれな

いが、その「死」の瞬間は印象的である。

まず老婦人の孫、收は病弱である。テニスをしている時だけ快活に見えた。その收が、無理をして柿の木に登り落下して死ぬ。この「死」は舞台上では、老婦人が收の死を予感し不安に駆られる形で表現される。老婦人の「死」は、死直前の錯乱した老婦人のことばで観客に予感される形で幕が降りる。「落葉日記」の場合、二人の「死」に至るまでの心理の微妙な変化がドラマである。

「動員挿話」について。

数代の「死」は、全く誰にも予感されなかった。全く虚を衝かれた形で不意に訪れて、一同驚愕し狼狽するうちに幕が降りる。ただ、数代自身は、それと意識せずに幕開きから「死」に向けて突っ走っている。しかも数代と鋭く対立する周囲の人物にはそれは全く気づかれていない。岸田はあるいは「死」に向けて突っ走る数代の心理を描いたのかもしれない。しかし数代と数代と対立する人物たちとの間に浮び上がってくる世相や、世相を反映した、明治三十七年当時の、あるいはこの作品の成立した昭和二年当時の「時代」といったものの方が観客に大きなインパクトをもって迫ってくる。上演回数の方に見られる人氣はここにあったのか。そして「時代」が上演を不可にした。

三 「落葉日記」の、まず周辺の問題

舞台は、東京の近郊にある老夫婦の家。雑木林を背にしたヴィラのテラス。登場人物は、老婦人、收（一場のみ）、アンリエット、弘（一、二場で登場）、一枝（收の母、二場で登場）、つる（二、三場で登場）、醫師（三場で登場）。收は老婦人の孫。病弱である。岸田は、收に「お祖父さまと云ひ、うちのお父さまと云ひ、アンリエットのお母さまと云ひ、みんな早死をしたんですね」とも、また「僕も早死をしさうだな。今度は、まあ助かったやうなものだけと……」とも言わせている。弘は、この一家にとつては、他人。柔道二段、第一場では、アンリエットのテニスのお相手をして、今しも帰宅しようとしている。アンリエットはこの弘に淡い恋心を抱いている。そして收はそのアンリエットに強い恋心を抱きつつ、その心を奥深く押し込めている。老婦人は、その收の心を知りながら二人がいとこ同志であるが故に拒否している。

今は亡き收の父とアンリエットの父は老婦人の息子である。アンリエットの父は、フランスで活躍している有名な考古学者である。娘アンリエットを母（老婦人）に預けたまま、ここに○年ばかり地中海のぐるりを歩きまわっている。收の父も学者、

人類学専攻であった。岸田は、

老婦人 佛蘭西ではね。それが却つて、日本の學界に容れられない理由らしいね。收のお父さんなんかは、あれで、三十そこそこで博士になつただけれど、お前のお父さんからは馬鹿にされてゐた。學問の系統が違ふと、ああまで排斥し合はなくつちやならないのかね。

アンリエット 收お兄さまのお父さまは人類學の方でせう。

と、言わせている。以下、登場人物の社会的地位にも触れる。

第三場は、今しも、外国から帰ってくるアンリエットの父を東京駅に出迎えに行こうとしている場面になっている。場所は勿論、一場、二場、三場ともに、東京近郊のヴィラである。

老婦人とアンリエットの話が東京駅での出迎えの話になつて、

アンリエット ほかに澤山人がゐるの。

老婦人 さあ、どうかか……。誰にも知らせなかつたかもしれないね、あの人のことだから……。尤も新聞には出てゐるんだから、歸つて來ることは知つても、……(略)

……

その久しぶりの帰朝を、新聞が記事にする程の人物である。

第一場で、收が、老婦人(祖母)と今は亡き祖父との写真を見つて、話題にする。

收 ねえ、お祖母さま、あなたが、お祖父さまと御一緒に巴里でお寫しになつた寫眞が、この間、お母さまの手文庫から出て來たんですよ。裾のしぼんだ黒いカアブを、かう、軽くひつかけて……。あれはルユクサンブウルでせう、誰かの像の前で、鳩に餌をやつてらつしやるところ……。かういふ手つきで……。それを見て、僕は、「へえ」つて云つたきり、そこへすわつてしまいました。

老婦人 そんな寫眞があつたかね。お祖父さまはどうしてゐるのさ。

收 お祖父さまは、これはまた、どうかなさればよささうなもの、ステッキを両手で、かう、水平に持つたまま——器械體操でもするやうにね——つくねんと、若い美しいお祖母さまの横顔を見つめておいでなのです。

祖父は外交官であった。「落葉日記」の登場人物たちは、渡邊一民氏の「岸田國士論 もうひとつの抵抗」のことは借りれば、「西洋と日本の融合した世界」に住居している。知識階級の人たちであり、有産階級の人たちである。老婦人は、アナトール・フランスの *La Vie en Fleur* を原語で読み、フランス語がしゃべれる人である。

岸田がよく取り上げる世界である。岸田の処女作「古い玩具」「チロルの秋」「牛山ホテル」の舞台はフランスであったりオーストリアであったり仏領インドシナであったりする。また「命を弄ぶ男」や「紙風船」や「葉櫻」「驟雨」等多くの作品に代表される知的有閑階級、あるいは都市の小市民階級の人たちの世界である。それは岸田自身が所属していた階級でもある。

四 「落葉日記」の死に至る手続き

1 收の死に至る手続き・ドラマツルギー

前述通り、收は密かにいとこのアンリエットを愛しているがその内心を打ち明けられずにいる。老婦人は、あるいはそれと意識せずに收の気持ちを知っているのかもしれない。しかし仮にそうだとすると、いとこ同志であるが故に、收の気持ちを拒

否せざるを得ない。このあたりの心理は、第三場で、錯乱した老婦人の口を借りて意外な一面が暴露されることになる。

ともあれ、收は、幕開き早々、老婦人の心を推し量りつつ、話の中にアンリエットを登場させる。

收 (それを制して) その前に、お祖母さま、一寸お話して

おきたいことがあるんです。(間) 此處でもいいでせう。

老婦人 ……?

收 それちやどうぞ…。(と、老婦人を再び座につかせ

て) 變だな、すこし……?

老婦人 なにさ、早く云つたら……。

收 今、言ひます。かういふ話をする時は、そんなに顔を見ないで下さい。

老婦人 あなたが下を向いてゐればいいでせう。それで、わたしに、どうしろといふのさ。

收 もう御存じなんですか。

老婦人 なにを……まあ、いいから云つてごらん。

間。

收 お祖母さまは、アンリエットをどういふ處へお嫁にやらうと思つていらつしやるんです。

話の中にアンリエットを登場させるまでの、收の心理に注目したい。思い切って決心して「お話しておきたいことがある」と切り出して見たものの、改まってみると、心に躊躇いが生じる。挙げ句の果に、誤解までやらかしてしまふ。老婦人に「あなたが下を向いてるればいいでせう。それで、わたしにどうしろといふのさ」と切り返えされて、「どうしろといふのさ」ということばを「アンリエットと收の仲をどうしろといふのか」という意味に取り違えて「もう御存じなんですか」と言ってしまう。そして收の気まずい「間」があつて、「アンリエットをどういふ處へお嫁にやらうと思つていらつしやるんです」になる。完全な心理劇である。

観客は、どういふ状況の中で、どういふ人物が登場して、どんなドラマが展開しようとしているかを知ることが出来る。これが、岸田の状況設定の部分のドラマ運びである。

次に、話の中にアンリエットに続いて弘を登場させて、收、アンリエット、弘の關係と気持ち、それらに対する祖母の気持ちを、岸田は描いて見せる。收が「僕は早死にをしそつたな」と言うのに対して、

老婦人 お前は、それがいけないんだよ。すぐに自分を弱い

ものと決めてしまつて……。

收 決めてやしませんよ。だから、今日だつて、テニスをやらうつて云へば、例の柔道二段が、君は駄目だつて、やらせないんです。アンリエットはまた、それをいいことにして、僕の方を振り向きもしないんです。

老婦人 Tu es bete!

長い沈黙。

Tu es beteは「意地悪！」程度の意か。終りの「長い沈黙」は、收の気持ちの表現でもあろうが、むしろ收のアンリエットへの気持ちを思い、收の気持ちを思いやっている老婦人の気持ちの表現の「間」であらう。老婦人は、その後、

老婦人 寒くないかい、お前、何も上に着なくて……。

今日は、風が冷たい。

と言う。このせりふは、同時に病弱な收の状態を表現している。続いて、老婦人の、收の健康を思いやるせりふがあつて、

收 (急に暗い顔をする) 海岸行きを止めて、もう少し、こ

ここにゐたいなあ。
間。

收の気持ちが分るだけに老婦人にはつらい間である。続いて、

老婦人 寒くさへならなければねえ……。何しろ、冬向き

ぢやないよ、ここは……。

收 どつち道、僕はここにゐない方がよささうですね。

老婦人 どうして？

老婦人は、意図的にとぼけた。つらい。

收 どうしてつて……。お祖母さまは、一番、そのわけを

御存じなんでせう。

老婦人 さ、もう、そのことを云ふのはおよし。男らしく、

さつさと發つておしまひ、ね。お祖母さまもわるかつた。

もつと早く、お前の心持ちを酌んで、できるだけのことを

すればよかつただけれど……。もう、今になつては、

どうすることもできない。お前はこれから、どんな幸福で

も……。

收は、アンリエットへのつらい思いを老婦人にぶつつける。

收 ……(略)…しかし、お祖母さま、僕は、今が一

番幸福なんですよ。いいえ、ほんとです。アンリエットは
まだ時々、僕と二人きりで遊んでくれます。(圈点松尾)

老婦人は、思わず、

老婦人 *Pauvre garçon!*

「かわいそうな子!」というほどの意味か。以後の老婦人の
收への気持ちを端的に表現すれば「ポープル ギャルソン!」
である。

岸田は、ここまで收のアンリエットへの思いと置かれた立場
つまり状況を持つて来ておいて、アンリエットと弘を登場させ
る。全く、準備完了、登場となる。まずアンリエットが、

この時、運動服姿の少女が、ラケットを振りながら、現
はれる。

弘は、その後、以下の状況設定の後に登場する。岸田の巧みなド라마運びである。

老婦人 それより、お前、弘さんは……。

アンリエット ええ、それがね、お祖母さまのところへ、左様ならをしに來ようとしてらしたのよ。さうしたら、それから、あの柿の木を見て、柿を取るつてきかないの。(松尾注 岸田の仕掛けである) だから、あたし、お祖母さまに伺つて來るから、待つてらつしやいつて、さう云つて來たの。

老婦人は、取ることを許す。收は、このまま、ここでじっとしている訳には行かない、ライバル?の前では。

收 僕も取らう。(かう云つて少女の後を追ふ)

老婦人 つるやにさう云つて、物乾竿を出してお貰ひ。

收 ああ。さうだ。(裏の方へ走つて行く)

老婦人 また、走るんぢやありません。

すると、入れ替わりに弘が現れる。

と、ここで弘登場である。そして、

アンリエット あら!

弘 もう遅いから、僕、歸りますよ。また叱られちやう。

アンリエット (つまらなさうに) どうして……。

柿の実取りの場に、弘を不在にした。收の死への手続きの一つである。

弘が去つた後へ、收が竹竿を持つて出て來る。

アンリエット (その竹竿を取らうとする) どら、貸して……。

收 君ぢや駄目だよ。

アンリエット いや、あたしが取る。

老婦人 アンリエット!

アンリエット (その方をちらつと見て、投げ出すやうに竹竿を收の手に渡す) あたしにも取らしてね。

二人、姿を消す。

これで、收が死ぬ場(状況設定)は出来上がった。なお、ア

アンリエットの下書きにある「投げ出すやうに」は、收への気持ちの表現ではなく、少女アンリエットの性格の表現であろう。

この後、岸田は以下のようにして、收を死に至らしめる。

舞台に柿の木はない。アンリエットの收に話しかける声によつてのみ收の動きは分る。舞台には老婦人だけである。これも、当然、岸田の仕掛けである。

老婦人は、アンリエットの声を聞きながら、アナトオル・フランスの *La Vie en Fleur* を読み始める。それも、音読である。その声が老婦人の心理の表現になる。

老婦人 (時々聲のする方に氣を取られるらしい。それでも、

すぐに、書物の上に目をおとす。音讀をし始める)

J'etis loin d'être un beau garçon (以下、略)

アンリエットの聲 どうするの。樹へ登るの あぶな
いわよ。

老婦人 (一寸、耳を聳てる。が、すぐに) (音読部分、略)

アンリエットの聲 (一段聲を張り上げて) あら、お祖母さま

ま、あのねえ、收兄さまがねえ、柿の樹の高い處へ登りま
した。

老婦人 (顔を上げて、心持ち肩をひそめるが、すぐにまた
目をおとし) (音読部分、略)

アンリエットの聲 お祖母さま、收兄さまがね、柿を皮ごと
たべますよ よろしいんですか。ずるいわ、そんな
. . . .

老婦人 (だんだん、落ちつかぬ様子を示した。目を書物
から放し、時々、聲のする方を見る)

アンリエット お祖母様、あのね、(姿を現はす) あのね、

收兄さまがね、柿の樹の上でお晝寝をするんですつて .

. . . . 目をつぶつて、腕組みをして、眠てるの。いくら
棒でつついても、起きないわよ。

老婦人 いたづらするんちやありませんよ。もう降りるやう
に、さうお言ひ

アンリエット (笑ひながら去る)

老婦人 (しばらく黙讀を續けてゐる) (松尾注 これは心
理描写である。特に間もなく音讀を始める、そこでこの
音讀も効果的な心理描写になる)

アンリエットの聲 收兄さま、早く採つて頂戴よ、暗くなつ

てよ。(間) いやね、もう少し左、左よ、左だつたら．．．
．．．(略)

老婦人 (再び音讀を始める)(音読部分、略)

アンリエットの聲 もういいわ、それくらゐで．．．ほん
とに、いいのよ、もう澤山．．．。(聲がふるへてゐる)
もうよして頂戴．．．。そんなに上は、あぶなくつてよ、
ねえ、收兄さま。もういいつて云ふのに．．．。(泣聲に
なる。急に、高い聲で)お祖母さま、收兄さまが、云ふこ
とを聴きません。ずんずん高い處へ登つて行くんですよ。
．．．細い枝のところへ．．．。(松尾注) もう死直前まで
来た)

老婦人 (びくつとする) 收、もういい加減にしないかい。

長い沈黙。

アンリエットの聲 それ御覽なさい。(間) え? みんなで

．．．? 一い、二う、三い、四お、五つ、六う、七、八あ、

(略)

老婦人 (また讀む。今度は、やや、高い調子で)(音読部

分、略)(松尾注) 老婦人の胸中はそれとなく、不安にう

ち震えている)

アンリエットの聲 あら、どうするの。そんな上へ登つて、

．．．收兄さま、駄目よ、駄目よ、その枝は駄目．．．御
生だから、降りて．．．。

老婦人 (此の時、突然何かに怯えたやうに、書物を放した

手を、癡癡的に、口のところにもつて行く。そして、アン
リエットの「あつ、あぶないッ!」といふけたたましい叫
び聲が聞こえる前に、もう立ち上がつてゐる) 幕

老婦人は、アンリエットの声の前に、体で收の死を知った。
観客も体で知った。

このアンリエットの声聞きつつ、舞台でただ独り老婦人が
アナトオル・フランスを音読する、その音読の声に老婦人の微
妙に変化する心理を反映させて、一気に收を死に持つて行く、
しかも、收の死を、收が死ぬ前に(アンリエットの声が響く前
に)体で直感する描写は、圧感である。

ただ、岸田のことは言えば、「魂の最も韻律的な響き」(演
劇の本質、岸田国士著「現代演劇論」)は、岸田が「．．．韻
律的な響き(動き)」と、「動き」と言い換えてはいるが、「落
葉日記」第一場の、この微妙な心理の揺れ、「韻律的な響き」
は、その「動き」を舞台化するには、大変な表現力が必要では
なからうか。舞台化は、非常に困難である。

2 老婦人の死に至る手続き・ドラマツルギー

㊦ 「收の死」の余韻

二場は、「收の死」の余韻が響く場面である。その余韻が、老婦人を死へ追いやって行くことになる。

アンリエットは、一〇時に弘が来ることを喜んでいる。つるが手紙を持ってきた。アンリエットの父からの手紙である。老婦人が收の死んだことを知らせてやった、その返事である。老婦人（母）からの手紙を受け取ったのは、アルジェリアで、二月二〇日であったらしい。收の死は前年の秋であった。その手紙の中には娘アンリエットへの手紙も同封されていた。

岸田は、その手紙の中で收の死に触れる。二場で收の死が出てくる最初である。曰く「收さんはお気の毒なことだった。その場にゐたお前もさぞかしびびくりしたらう。止めても聴かなかつたと云ふのだから、お前に罪はないわけだが……」と、父の立場で、アンリエットとの関係で收の死を位置づけしている。岸田の意図であろう。

続いて、「喪中に相應しい日本服」を着た一枝（收の母）を登場させる。

一枝 もう大丈夫だと思つてゐましたのに、此處へ來ると、

やつぱり……。 (目にハンケチを當てる)

老婦人 それや、さうだらう。

長い沈黙。

一枝 柿の木、もうお伐らせになりましたのね。

老婦人 あれで、なかなか手間が取れたんだよ、運び出すのに……。まる一日がかりだった。倒したのを見ると、随分、大きな樹さ。根も掘り出して、持つて行かせたの。あの跡には、收の好きだった「もつこう薔薇」でも植ゑようかと思つて……。

一枝 ……。

老婦人 わたしも、秋から、すっかり老い込んでしまった。

ここでは、岸田は、老婦人にごく常識的なせりふをしゃべらせている。收の死んだ柿の木は、跡形も残したくない。根も掘り出して持つて行かせた。跡には、收の好きだったもつこう薔薇を植ゑようと思う。素直な気持ちとして受け取っておこうと思う。そして、すっかり老い込んでしまったと言う。老婦人の死への第一歩である。

老婦人 相手がるてくれるといいんだよ。

長い間。

一 枝 相手がるてくれるといいんですわ、どんな相手でも・
・
長い間。

二人とも、自分にとって相手にとってもつらい間、お互いに相手のつらい気持ち思いやる間である。そして收の思い出話になる。

老婦人 收なんかも、病気のせいもあつたらうけれど、何かの運動のやうなことをしてゐる時だけだつたからね、快活らしく見えたのは・
・

一 枝 あの子は、運動は、あんまり好きぢやなかつたんですけれどね・
・

老婦人 それが、やれば、ああなるんだから・
・
元氣さうに・
・
面白さうに・
・

一 枝 アンリエットさんと一緒だつたからでせう、それは・
・

老婦人 そればかりぢやないよ。

長い沈黙。

一 枝 子供の時から、木登りなんか、ただの一度だつてしたことはないんですけれどね。全く不思議なくらゐるでわ・
・
あの日に限つて・
・
なんだつて、また・
・
老婦人 もうそれを云つたつて、仕方がないさ。(以下略)

二人の気持ちは、完全に擦れ違つている。我が子を失つた一枝の気持ちは痛い程伝わってくる。そして、老婦人にしてもらひ気持ちは同じはずである。しかし二人の気持ちは、完全に擦れ違つている。岸田は、そう意識して書いたものと思う。

岸田は、それにもう一押し、念押しをする。一枝の痛烈な心の痛みに触れさせて、老婦人の心を痛めつける。

一 枝 あたくしね、昨日、本棚の整理をしてゐましたら、收の日記を見つけたの。

老婦人 日記をつけてゐたのかい、あの子・
・

一 枝 飛び飛びなんですけれどね・
・
どの日附を見ても

Hがどう云つたの、Hがどうしたのつて書いてありますでせう。Hつて誰かと思ひましたら・
・

老婦人 アンリエットのことだらう。

一 枝 ええ。あたくし・
・
始めて知りましたの。

間。

老婦人 *Pauvre garçon!*

長い沈黙。

一枝 ちつとも、気がつきませんでしたわ。(間)・・・随分苦しんだらしいんです。

老婦人 よく黙つてゐてくれたよ。・・・自分でも、いろいろ考へてゐたらう、出来ない相談だと云ふことを・・・。

一枝 従兄妹同志ですけれどね・・・。

老婦人 それにしてもさ・・・よく黙つてゐてくれた・・・。

一枝 ええ。

恐らく岸田は、もの静かにしゃべることを期待して、これらのせりふを書いたはずであるが、一枝の齒きしりしたいほどの口惜しさは伝わってくる。そして、老婦人の方は、心の底から「よく黙つてゐてくれたよ」と思っている。「*Pauvre garçon!*」は、これまた老婦人の痛烈な收への思いである。ただ、この思いが收を、そして老婦人を死に追いやったと考えるのは考え過ぎであらうか。

一枝の「従兄妹同志ですけれどね・・・。」は、特に「けれ

どね・・・。」の部分の気持ちは、どんなものであったのか。岸田は、老婦人に「それにしてもさ」と受けさせている。一枝は、いとこ同志ならもつと別の対応が出来たはずと言いたいのだろうか。筆者は、いささか理解に苦しんでいる。

この後、比喩的に言えば、老婦人は、收の亡霊に憑かれる。二場の終りの場面である。アンリエットの気持ちなど知るよしもない弘は、大阪へ養子に行く、先方の会社をいずれ継ぐことになる、別れの挨拶に来て、去った後、

老婦人 (元の座につき、アンリエットを膝の上に抱きながら) 泣くひとがありますか、そんなことぐらゐで・・・。

アンリエット (恥かしさうに老婦人の胸に顔を埋める。が、何を思ったか、急に、其處を離れて、奥へ逃れ去る。階段を駆け上がる足音)

老婦人 (あつけに取られて、一枝と顔を見合せるが、不圖或る豫感が頭をかすめたらしく、急に席を起つ。しかし、思ひ直して、今度は、足音を忍ばせながら、靜にアンリエットの後をつける)

(中略)

暫くして、老婦人が相變らず足音を忍ばせながら現はれ

る。極度の不安から解放された時の、やや疲れたらしい顔つき。

一 枝 大丈夫ですの。

老婦人 なにが？アンリエットかい。（それに答へず）やっぱり、いけなかつたね。

一 枝 でもね……。さういうもんですわ。

老婦人（溜息をつき）またかと思つた。

一 枝 え？またかとは……？

老婦人は、アンリエットが、收の二の舞をやったのではないかと、恐怖に駆られたのである。

④ 老婦人の死への手続き

第三場は、老婦人の倒れるところから始まる。老婦人とアンリエットとの間で、アンリエットの父を迎えに行くことが話題になっていて、

かう云ふと、急に、片手を額にあて、もう一方の手を、アンリエットの肩を支へて、ひよろひよろつと前にのめらうとする。アンリエットと、つるが、慌てて、抱き止

める。

アンリエットの指示で、つるが医者を呼ぶために電話を掛けに行く。老婦人は、気も弱くなっている。医者が来てはここではよくないと、「立ち上がらうとするが、また椅子に倚りかかる」という状態で、結局最後まで、老婦人は、「ここ（舞台）から動けないという設定になっている。やがて、医者が来る。脈をとる。臉を見る。胸に聴診器をあてる。口先では「たしかなものです。御心配はいりません」と言いながら、「今日は、安静になさつていらした方がいいでせう」と、息子（アンリエットの父）を出迎えに行くことを止める。老婦人は、

老婦人 から、意気地がございません、かうなりますと……。

息子を迎えに行くことを諦めて、アンリエットをひとりで行かせることにした。アンリエットが出て行って、後には、老婦人と医者、それにつるだけが残った。收の死の話を、老婦人は持ち出す。

老婦人 去年の今頃も、先生がかうして駈けつけて下さいました。

醫師 ああ、さうさう……。しかし、どちらも、違った意味で、私が不必要でしたな。——あの時は、全く、手の下しやうがありませんでした。(松尾注 観客はすでに老婦人が余命いくばくもないことを医者のことばやしくさから察している。医者のことばは観客に緊迫感を与える)

老婦人 あたくしが、ここに、かうして、書物を読んでるましたんですよ。

醫師 さうでしたか。お驚きになつたでせう。

老婦人 變なものですわね。あの子が——收つて申しますんですが——柿の木へ登つて柿を取つてゐることは知つてゐたんでございますよ。危ないことをする、早くやめてくれればいい、さう思ひながら、つい、止めることもせず讀む方ばかり氣を取られてゐたんでございませう。

(中略)

老婦人 あれ(松尾注 アンリエット)が何か、大きな聲で、しきりにあたくしに云ひつけてをりますのが耳に入りながら、どうしたと云ふんでせう……。あれで、一度か、二度か、注意はしたと思ひますんですけれど……。

醫師 どうも怪我といふものは、こいつ、豫め、なんとするわけにも行きませんしな。

老婦人 それがね、後から考へてみますと、ただの怪我ぢやないらしいんですの。こんなこと、申し上げていいかどうか存じませんが……。

醫師 いや、それは伺ひますまい。(以下略)

「後から考へてみますと、ただの怪我ぢやないらしい」と言う老婦人は、何を考へているのか。收が自殺だった、とでも言いたいのか、医者を受け方から考へると、そういう意味に取れるが、このせりふの意味は、筆者には、目下不明である。

この直後、老婦人は、自分の死を直観的に予知する。

老婦人 その跡へ、「もつこう薔薇」を植ゑさせましたんですけれど、よくつかないらしいんですの。收といふ子が、あの花が好きでしてね。(圈点 松尾)

醫師 はあ。(脈をみる)

長い沈黙。(松尾注 以下、観客は緊迫の度を増す)

老婦人 なんですか、胸騒ぎがして……。

醫師 (黙つて脈を見つづける)

つるが現はる。

つる (醫師に) 何か御用はございませんですか。

醫師 あ、それちや、一寸、わたしの處へ行つてね。．．．

いや、伴のものに、これを取りにやつて下さい。(紙片に

何か書きつけて渡す)

つる はい。(退場)

醫師 御氣分は．．．？

老婦人 少し頭痛が．．．。

醫師 静かになすつていらつしやい。すぐよくなります。汽

車は、何時ですか。

老婦人 五時三十分．．．。

醫師 (時計を見ながら) 五時三十分と．．．。

老婦人 間に合ひませうか。

醫師 何がですか。

老婦人 お隠しになつてはいけません。仰しやつて下さい、

ほんたうのことを．．．。

醫師 ほんたうのことと云ひますと．．．。

老婦人 丁度必要なだけ．．．。(溜息)

醫師 なにがですか。

老婦人 あたくしの命が．．．。

醫師 御常段おつしやつちやいけません。

老婦人 (苦しきうに) ここでは困ります。

(中略)

老婦人 つるや、わたしを、向うへ連れて行つておくれ。

(中略)

醫師 お連れする前に、一寸、カンフルを一本射しときませ

う。

しばらくして、老婦人は錯乱する。錯乱したことばの中に、

意識の底に眠っていた本心が露出する。その本心は意外性に満ちている。收の死が、老婦人を死へ向むけて、ここまで運んできた。

以下、体と心は死に向かつて一直線に進む。死への最後の手

続きである。体の死は、医者 の処置と表情で描かれる。心の死

は、錯乱した意識のことばで表現される。

老婦人 あたくしは、もう息子を一人失くし、嫁を一人失く

し、孫を一人失くしたんですからね。それから、もう一人

の息子は、十年間もあたくしをうつちやらかして、旅へ出

たまま歸つて来ようとはしなかつたんですもの。(松尾注

ここまでは、言ってみれば序論) それでも、自分の手許には、さきほどのあの孫娘を、世の中にたつた一つしかない寶のやうに、大切に預つて、可愛がられるだけ可愛がつて來ましたのが・・・それさへ、今日、赤の他人に奪はれてしまふんです。赤の他人も同様です。それは、旅から歸つて來る俵のことを申すではありません。もう一人の、何處からか、不意に現はれて、あたくしの息子だと云つて、大きな顔をしてゐる男です。

醫師……………。

老婦人 これは自分の娘だ・・・さう云つて、また、あたくしの手から、あのアンリエットを攫つて行かうとしてゐるんです。あたくしの俵なら、そんなことはしない筈です。ねえ、さうぢやございませんか。

醫師……………。(體温器を外して見る。首を傾ける。不安らしい表情)

老婦人 あのアンリエットの爲めには、あたくしは、殆ど、一人の男をさへ殺しました。その男とは、やはり、あたくしの可愛がつてゐた孫です。父親を失くして、一生目を曇らせてゐるのかと思はれるやうな、あの寂しい男の子……………。このあたくしですよ、あの收を殺しましたのは、

……………。(溜息)

醫師 奥さん。

老婦人 ええ、さうです。柿の木から……………。あの柿の木の一つづつに、アンリエットの心臓が、赤く、ぶら下つてゐたんですもの……………。(松尾注 この赤さは、どきどきさせる効果がある)

アンリエットへの思いを、老婦人はここで始めて告白した。「告白」と表現してもいいのかもしれない、敢えて「告白した」と書いてみた。アンリエットへの思いは、意外性に満ちている。そのアンリエットとの対比?で、アンリエットの父(自分の息子)への憎しみを、老婦人はぶつつける。あるいはこれは、一〇年間、自分の許へ帰りもしなかつた息子への恨みなのかもしれない。さらには收へ思いをぶつつける。結局、收への罪の意識が老婦人の深層の意識の中にあつたのであろう。その「收への罪の意識」は、目前にはいない一枝(收の母)に向かう。

老婦人 (だんだん興奮状態になる) 一枝、ゆるしておくれ。お前の、かけがえのない一人息子が、ああまで思ひつめてゐたアンリエットの目に、その頃から、弘といふ青年が映

つてゐた——それから、その青年の方でも、アンリエットを——かう思ひ込んでゐたわたしが、この春、どんな悲劇を見せられたか、一枝、お前だけは、ちやんと、それを知つてゐるね。(松尾注 一枝は知らない。自分を責めてゐるのである)

醫師 (老婦人の脈をとる)

老婦人 お前は、その時、收のことを思ひ出してゐた。さうして、わたしを、例の目で見てゐた。わたしは、この一年間、お前のその目を、とれだけ避けようとしてゐたか。お前は、なんにも知らないといふだらう。誰がそれを知つてゐるよう。だが、お前は、やつぱり、母親だもの……。子供の運命については、神の聲を聞くことのできる母親だもの……。お前は、その敏感な母親の鼻で、わたしの罪を嗅ぎ當ててゐたんだね。

醫師 (益々不安な表情)

老婦人 (息苦しさに、しかし、朗らかな聲で)

O Thebains! Jusqu'au jour qui termine la vie.....

最後のラ・フランスの文章は、おお、テーベよ、生命の終る日は……、というほどの意か。「收への罪の意識」が、一枝

への痛烈な思いとなつて、殆ど炸裂する。「お前は、その敏感な母親の鼻で、わたしの罪を嗅ぎ當ててゐたんだね」は、痛々しい。その「收への罪の意識」が、老婦人を死に至らしめた、と言ふことは出来よう。幕切れは、以下の通りである。医者に言われてゐるは知らせるべきところへ電話をするために、退場する。

醫師、注射をする。

老婦人 アンリエット……アンリエット……。

醫師 今、すぐ……。もうちきです。

老婦人 收、何をそんな顔して見てゐるんです。そんな處に、

誰もゐるやしないよ。

醫師 (老婦人の脈をとる)

長い沈黙。

この頃から、夕日があたりを染め、老婦人の顔に、一種莊嚴な光りを浴びせはじめる。(松尾注 この色彩も見事である。「死」を美しく彩る)

老婦人 (やや穏やかな調子に復し) そうら、踏つて来た……。もう少し遅いと、母さんは、お前の顔が見えなかつたんだ。さ、こつちへおいで……。海は荒れなかつたか

い。(間)よく歸つて来てくれたね。あんまり遅いので、母さんは、お前が道に迷つたんぢやないかと思つて心配したよ。まあ、どうしたの、その埃は……。

ほんの少し前に、「それさへ、赤の他人に奪はれてしまふんです。赤の他人も同様です」と一〇年ぶりに帰国してくる息子にアンリエットを奪われることに憤慨していたのに、今は、その息子の幻影に語りかけている。そして、長い沈黙の後の、次のことばで幕が降りる。

みんな揃つたかい。收はどうした、收は……。(間)
あ、誰か、早く……。 (間) 免しておくれ……。わた
しは、ただ、少し、長生きをしすぎただけだ……。た
だそれだけだ……。

日が沈み終つて、舞臺、次第に暗くなる。 幕

結局、錯乱した老婦人の意識は、收のところへ戻る。「免しておくれ」、そして「ただ、少し、長生きをしすぎただけだ」恐らくこの後、一瞬、夕日が美しく輝いて、舞臺が暗くなると同時に、老婦人は絶命したはずである。と、観客は思う。

3 しめくりりに代えて

「落葉日記」の上演記録は、新潮社版「岸田國士全集」にはない。恐らく上演はされているであろうが、数少ないものと思う。なぜか。第三場の、老婦人が錯乱して、本心を露出する部分の描写が、恐らくその理由の大きな一つではなからうか。

戯曲の読者は、立ち止まり、繰り返し読んで、岸田の表現意図を理解することは出来る。しかし、舞臺化して表現すれば、いかに工夫を凝らしてみても、あるいは、名演技者を得て表現してみても、恐らく老婦人が、意識が錯乱していること、そこから来る「悲惨さ」といったものは表現できても、意識の錯乱の奥底に表現されている深層心理までは、観客は、理解し難いではなからうか。

ここは、心理小説で始めて表現し得る世界ではなからうか。その他、心理の変化を辿りにくい部分も、多少あるように思える。それも、この戯曲の不十分な部分として指摘することが可能であらう。

五 「動員挿話」の「數代」の死に至る手続き

1 「數代」その他の登場人物と、状況設定、その他

時は、明治三十七年、場所は、宇治少佐の居間（第一幕）、馬丁友吉の部屋（第二幕）、登場人物は、宇治少佐、釣り子夫人、馬丁友吉、妻敷代、従卒太田、女中よし。

その明治三十七年（一九〇四年）二月一日には、日本は、ロシアに対して、宣戦布告をしている。日露戦争である。

明治二十三年（一八九〇年）生れの岸田は、陸軍士官学校では、成績優秀な軍人であった。だが岸田は父の意に反して、その軍職を捨てて、東大仏文に入學、さらに勘当同様の身分でフランスに渡っている。父も職業軍人であった。周知の事実であるが岸田は帝国主義者、軍国主義者ではない。大正一二年（一九二三年）にフランスから、フランス文化と教養を身につけて帰国し、翌一三年には「古い玩具」「チロルの秋」とヨーロッパを舞台にして、日本の知識人を描いた新鮮な感覚の戯曲を発表し、賛否両論の話題を呼び注視的となっている。ただこの帰国は、岸田自身の望んだものではなかったようだ。前年一二月の父の死とともに、家督相続の義務のある岸田は帰国を余儀なくされたのである。「岸田國士論」渡邊一民著）

作中の人物「宇治少佐」のような高級将校とその家庭は、岸田の周辺にはあったはずである。夫人がおり女中がおり馬丁がいるという家庭である。

舞台は、騎兵隊高級将校宇治少佐が、明日、家庭を出立して入隊、やがて戦場に向かうというその前日である。連れていく二頭の馬のうち、副馬はよいが、正馬は手のかかる馬でやつと馬丁友吉に馴れたところである。少佐は友吉を呼んでお前は戦場へついてくるよう、敷代を説得せよと命令している。

岸田は、その敷代に特異な性格を付与した。そうしなければこの「動員挿話」は成立しなかったと考えられる。岸田は、馬丁の家の内くせに女学校卒業という、当時の女性としては最高学歴の人物にした。少佐の口を借りれば「馬丁の家が、なまじつか、女学校なんか出てるからいけないんだ。言ふことは生意氣だし、することが巫山戯てるでどうも氣に食はん」という女性である。その敷代が、友吉が戦場へ行くことに反対する。これが「動員挿話」の状況設定である。

2 「敷代」の死に至る手続き

自分の気持ちに貫く敷代と、鋭く対立する世の中の考え方、思想との落差が、敷代を死に追い込んだという考え方も成立すると思う。以下、それを検証していく。

まず第一場、幕開き間もないところで、

少佐 …… (略) …… そいや、今日は歸つていゝ。家
のものには、もう會つたのか。

從卒 いゝえ。まだ會ひません。別に用もありません。

夫人 でもねえ……。

少佐 明日は來んでもいゝ。それから、副官に、今晚はもう
用はないからつて、さう云へ。

從卒 は。副官殿に、今晚はもう御用はないつて、さう申し
ます。(證明書を取り出し) 御判をどうぞ……。

少佐 出發前に、からだをこはさんやうにせい。

從卒 はあ。(軍用鞆を擔ぎ、出で去る)

何気ない場面であるが、巧みな状況設定を岸田は行っている。
まず戦場に出かけるのだという設定、この場面の直前では少佐
が、ウイスキーをたくさん持って行こうとしていること、酒に
酔つて殺ると凍死する恐れがあるということ等の話が夫人と從
卒との間で交わされるところから、寒冷地、日露戦争の戦場と
なっている所へ出陣しようとしていること、少佐が多くの部下
を指揮する高級軍人であること等が分る仕組みになっている。

そして、この場合重要なのは、少佐と從卒との間で交わされ
る對話の中に表現されている当時の世間一般の考え方・思想で

ある。恐らく岸田は何気なく書いたはずであるが、少佐に「家
のものには、もう會つたのか」と問われて從卒が「いゝえ。ま
だ會ひません。別に用もありません」と答える。「別に用もあ
りません」は、決して從卒の家庭の問題ではない。男子たるも
の、戦場に出で立つに當つて妻や子供たちに後髪を引かれるよ
うな女々しいことはしないものなんだ、という潔さ(美德)が
表現されている。これが、數代や友吉との鋭い対比になるよう
に書かれている。ドラマ展開への伏線である。

続いて、次に數代の間像が描かれる。

少佐 敗つていふ女は、どうも子供によくない智慧をつけて
いかん。玩具の鐵砲を自分の喉に當てゝ、自殺をする眞似
なんかして見せたらしい。

夫人 まあ、何時ですか。

少佐 …… (略) …… 誰から習つたつて訊いたら、數か
らだつて、さう云つた。

夫人 ほんとに困りますわね。

少佐 馬丁の家内が、なまじつか、女學校なんか出てるから
いけないんだ。言ふことは生意氣だし、することが巫山戯

てみてどうも氣に食はん。おれの留守中でも、あんまり子供なんか委せて置けないよ。

夫人 氣を付けますわ。世間を知りすぎてるんですわね。

少佐 すれてるのさ、つまり……。

數代の學歷に関しては先述した。その數代への少佐たちの評価は「世間を知りすぎて」いる、「すれてる」である。

ここでは、「玩具の鐵砲を自分の喉に當てて、自殺をする真似」について考えてみる。これは男子の自害である。昭和二年当時（作品成立当時）の岸田は、どう考えていたのか。昭和五年（この作品の上演記録のある最後の年）生れ、中学三年まで軍國主義の教育を受けてきた筆者が、敢えて軍國主義の教育を反映させた考え方をしてみれば、時に臨んでの武人の自害は、深い美徳である。自害の作法の指南は、あっぱれ武人の子弟への悲愴で美しくも望ましい教育のはずである。あるいは女風情が男子の自害の作法を教えるのがよくないというのであろうか。それは絶対にあるまい。むしろ昭和二年当時少なくとも高級職業軍人には、まだ素直な人間らしい考え方の出来る人間もいた。それが少佐の數代への評価（先述）にも繋がった。またそれは、岸田自身の考え方もあったと考えるのが至当ではな

かるうか。さらに、この自害の話は數代自殺の大きな伏線となっている。

続いて、世間一般の戦争への考え方（思想）が描かれる。

少佐 それとも、戦争に行くのがこはいか。

友吉 いゝえ、こはくはありません。（松尾注 男子たるもの、絶対に怖いとは言えない）

少佐 そんなら、どうだ。行くか。

友吉 （また、顔を伏せる）

少佐 兵隊に取られた（松尾注 徴兵）と思へばなんでもなからう。そのからだで、その若さで、意氣地のないことは云ふまいな。（松尾注 圈点松尾、以下同じ）

友吉 ……。

少佐 人間はどうせ一度は死ぬんだ。疊の上で死んでも一生は一生、汽車に轢かれて死んでも一生は一生だ。國家の爲に、深く命を投げ出せば、それだけ死花を咲かせることになるんだぞ。男子の本懐ぢやないか。

友吉 （黙つて頭を下げる）

少佐 給料は倍にするし、お上からも、無論手當は出る。そ

の上、無事に歸れば、從軍徽章も頂戴できるわけだ。

夫人 それに戦争と云つても、普通の兵隊さん見たいに、そんなに危ないところへ出ないでも済むんでせう。

少佐 それもさうだ。なに命は大丈夫だよ。(問) こつちへ残して行くものゝ世話は勿論引き受ける。お前に萬一のことがあつても、心配はいらん。

友吉 (黙つて頭を下げる)

少佐 無理に引張つて行くわけにも行かんから、お前のいゝやうにしる。

友吉 ちや、一つ、嬬に相談して見ます。

少佐 それがよからう。だが、お神さんは、お前、女だぜ。

国家の爲に死ぬことは死花を咲かせることであり、男子の本懐である、その問題に女が介入するのは望ましくない、という価値観、從軍徽章の象徴的価値等は、当時ごく普通の考え方(思想)であった。当然、戦場へ行く決意をさせるごく普通の勧誘手段であった。それに加えるに給料が倍になる、お上から手當が出るという実利もまた有効な手段であった。それでもはかばかしく「戦場へ行く」と言えない友吉の事情とその人柄を、岸田は次第にはっきりさせていく。

岸田は、友吉に、「あの女は、一度云ひ出したことは後へ引かない女で」友吉が行く事に不承知だと言わせて、(數代に)「旦那からよろしくおつしやつていたよきたい」と話を進めて、數代を登場させる。

少佐 ……(略)……今度、戦争がはじまつて、師團にも、動員が下つたわけなんだが、知つての通り、將校は馬丁を一人連れて行くことになつてゐる。おれは、友吉を連れて行かうと思ふが、お前に異存はないか。

數代 (黙つて友吉の顔を見る)

友吉 (その視線を避けて、顔を伏せる)

少佐 今、友吉に話したところだが、友吉は、お前さへ承知すれば、行つてもいゝと云ふのだ。これがわれわれ兵隊なら、家内に相談も糞もない。それだけまあ、馬丁などは自由なわけだが、日本の男と生れて、この千載一遇の好機會に、少しでも國家の爲に働き度いと云ふ望みは、これは、誰しも、一様なわけだ。

數代 さう致しますと、行つても行かなくつても、それは本人の勝手なんで御座いますか。

少佐 まあ、さうだ。

數代 それなら、宿は、お伴を致し兼ねます。

少佐 それや、どうして……。

數代 別れるのがいやで御座います。

少佐 たゞ、それだけか。

數代 たゞそれだけで御座います。

數代の「個人の論理」と「国家の論理」とが真正面からぶつかった。少佐に「われわれ兵隊なら、家内に相談も糞もない」と言わせているが、岸田が、友吉を馬丁にした理由は、ここにある。そして、「個人の論理」を主張させるためには、數代に「女學校卒業」という最高學歷を付与しておく必要もあつたと思われる。さらに、

數代 ……(略)……あなたが戦争なんか行けるもんで

すか、人一倍臆病なくせに……。鐵砲の音を聞いたただけで腰をぬかすでせう。

友吉 冗談云ふない。そんなこたないさ。それに、馬丁は、危ないところは行かないんだとさ。

數代 あたしがいやだつたら、仕方がないぢやないの。

數代の論理は「感情の論理」である。理屈で納得させられるものではない。強い。

少佐 わかつた。もう何も聞く必要はない。お前は、それで女學校まで行つたと云ふのに、國民の義務と云ふことがわからんと見えるな。しかたがない。いま、わしが、それを教へてゐる暇はない。友吉も、よくよく運の悪い奴だな。

これから、何處へ行つても、肩身の狭い思ひをするんだ。

數代 そのことなら、御心配下さいませ。此の人に肩身の狭い思ひをさせて、わたしが黙つてはをりませぬ。世間はもつと廣い筈で御座います。

夫人 數や、口が過ぎはしないかい。

少佐 もういゝから、二人とも、あつちへ行け。そんな奴等と口を利くのも汚ららしい。今日限り、主従の縁を切るからさう思へ。

友吉 相済みませぬ。

數代 致し方ございません。その覺悟だけはいたしてをりませぬ。……(以下、略)

數代は、恐らく意志ではなく、感情に任せて思うままにもの

を言っているのであろう。それにしても、昭和二年とは、まだまだのんびりしていた時代だったのだなとつくづく思う。高級將校である上官にこんな口を利いて、ただ「今日限り主従の縁を切る」だけで済むとは、筆者にとっては驚きである。という発言を敢えてしているのは、岸田には、反軍国主義のイデオロギーなどは決してないからである。岸田はイデオロギー演劇は決して認めようとはしなかった。これらの登場人物の発言は、岸田の物の考え方や人間性と、時代の表現である。

岸田は、第一場も終り近くになって、數代の心理に揺さぶりをかける。友吉の、數代の意に反した発言である。

少佐 おれが自分で置く。出陣の鞍を置くのに、そんな意氣地なしの手を藉りたくない。(憤然と起つて、奥に去りかける)

數代 (キツとなつてその後を見送る)

友吉 (滿身の勇をふるひ起こすやうに) 旦那……。

少佐 (後をふり返る)

友吉 意氣地なしとはなんですか。(聲をふるはせ) わたくしは、命なんか惜しくはありません。わたくしも男です。

そんな侮辱を受けるわけはありません。

少佐 (故らに微笑を泛べ) よし、意氣地なしと云はれて腹が立つなら、お前の根性もまだ腐つてはるない。もう一晚考へろ。(姿を消す)

この友吉の発言が、數代の次の発言を導き出した。「言いたい放題」とでも表現したくなる発言である。列記しておく。

數代 ……(略)……たとへ此の人が意氣地なしでも、

わたしに取つては、かけがへのない大切な夫で御座います。御主人様御一人の御機嫌を損じたゞけて、夫の命を拾ふことができれば、こんなうれしいことは御座いません。

數代 いゝえ、奥さま方と、わたくし共とは、物を見る眼が違ふので御座います。立派な御身分の方々は、その御身分だけの氣高い御心掛けがあるんで御座いませうけれど、さういふ御心掛けは、わたくし共にはわかりません。通用いたしません。わたくし共に取つて、名譽は紙屑と同じで御座います。陸軍の馬丁が、死んで神様に祀られると申せば、馬が嘔ひます。

數代 …… (略) …… 例へ、何百萬圓といふお金を積ん

でいたゞきましても、此の人を戦争に出すことはいやで御座います。戦争はおろか、一日別れてゐることさへ、わたしにはできません。… (松尾注、以下友吉と巡りあうまでの、前の二人の夫のことに触れ) …… 此の人と一緒になつた時、今度こそは、どんなことがあつても側を離れまいと決心いたしました。… (略) …… 此の人が病氣で斃れたら、わたくしもその後を追ふ覺悟をいたして居ります。… (略) …… 此の人が旅へ出る時は、わたくしもきつとついて行くつもりでをりました。一身同體とまで申します間柄に、どうして別れるなどといふ悲しいことがあるんで御座いませう。… (略) …… 夫人 (しんみり) 口で云ふだけでなく、それがほんたうに出来る身分だから羨ましいよ。

「ほんたうに出来る身分だから羨ましいよ」と夫人に言わせている。まだまだ人間としての本音が書ける時代であつた。岸田の本音の一面である。岸田は、全身で夫を愛する女性を書いたとも言えよう。

第一場は、次のように終る。

數代 どつちが可愛いのよ。

友吉 (數代の顔を指で突つづく)

數代 (その手を取り) それ御覽なさい。もう心變りをしちやいやよ。ぢや、きめたわね。(間) さ、はやく何處かへ行きませう。(急に明るい顔になり) 大阪へ行かない、大阪へ…。大阪ならあたしの叔父さんがゐるわ…。きつと、どうかしてくるわ…。ね、さうしませう。さ、早く…。(起ち上つて友吉を引き立てようとする。友吉は、なかなか起ち上がらない)

岸田は、數代を幸福な氣持ちにして第一場を終えた。死に至らしめる有効な手續きである。第二場での、數代の絶望との落差を、岸田は大きくしたのである。

第二場、幕切れに向けて。

岸田は、第二場、幕開き早々に數代の価値観と対立する価値観(当時の美德)を、女中よしの口から數代の耳に入れる。

よし …… (略) …… さうさう、今朝、旦那さまと奥さまが、水盃つていふのをなすつたわよ。

よし あたしなんか、あゝいふ時、どうしても泣けちまふね

數代 奥さん、泣かなかつた？

よし 不思議だね。

よし 勇しいやうな、悲しいやうな、あたし、萬歳つて云ひ
たくなつたよ。

岸田は、この後、數代に、こう云つた当時の美德である価値
観への數代自身の考えと、自分の本心を語らせる。この部分は
「動員挿話」理解のための重要な一つのポイントにならう。同
時にこの後の、心の乱れた數代の心理を描くためにも有効な手
段、手続きとなっている。

數代 ……(略)…… 旦那さまをお見送りしながら、わ
たくし、かう、大きな力にうたれるやうな氣がいたしましたし
たの。奥さまは、坊ちやまのおつむに、お手をおかけにな
つて、たゞ黙つて、お目をお伏せになりました。お坊ちや
まが、いつもの通りに、「行つてらつしやい」つて、元氣
よくおつしやいますと、旦那さまは、あとをお振り返りに
なつて、優しく目禮をなさいましたでせう。すると、奥様

は、急に坊ちやまをお引き寄せになつて、かうお笑ひにな
りましたわね。

夫人 まあ、詳しく見てたのね。

數代 見ておりましたとも……(間)奥さま、わたくし
は、あの時、自分がほんたうに見すばらしい女だといふ
ことがわかりました。でも、それは致し方御座いません。
わたくしどもには、かうしなければならぬといふこと
がないんで御座いますもの……。

夫人 その方が氣樂でいゝわ。

數代 その代わり、いつも眼の前は眞暗で御座います。一人
で歩くことができます。どうかすると、勝氣のやうに見
えますけれど、あれはたゞ、自分を叱つてゐるだけで御座
います。

數代の人間像を単純に考えると、この數代の発言には疑問を
呈したくなるが、數代に、世間が美德と認めている水盃の別れ
の場の話聞かせ、また玄関での親子の別れの場を、夫人に「ま
あ、詳しく見てたのね」と云わせるくらいよくよく見させたの
は、岸田にそう書かずにはおれないものがあつたのであろう。
それが同時に、「いつも眼の前は眞暗」「一人で歩くことができ

ません」「勝氣のやうに見え」るが、「自分を叱つてゐるだけ」と數代に云わせずにはおれないものに繋がって行つたのである。岸田の本音の別の一面である。第一場で、「陸軍の馬丁が、死んで神様に祀られると申せば、馬が嘔ひます」と啖呵を切つたのと同じ人物と思えなくらいの変化を見せている。続いて、數代は拗ねる。岸田は、自分には到底真似の出来ない立派な価値の高い行為を見せられて拗ねずにはおれなくなるところまで、數代を連れてきた。かくて數代は、拗ねて泣く。

數代 ……(略)……どうせ不義理をしてお暇を頂くんで御座いますから、いつそ、激しいお小言を浴びながら、御門を出ました方が、幾分でも心が軽いやうな氣がいたします。

夫人 それがお前の悪い癖だよ。

數代 いゝえ、奥さま、どうかもうほんとにわたくしたちのことはお氣にかけて下さいませんやうに…。

夫人 さう、お前見たいに、人の親切を無にするもんぢやないわ。

數代 さうで御座いますか。わたくしどもは蔑みを受けるだけでは、まだ足りないんで御座いますか。此の上、まだ、

構みを受けなければならぬんで御座いますか。(急に語調が亂れる)それや、あんまりです…。(泣く)

數代は、罪の意識に苛まれ、心乱れているようにも見える。岸田は、數代を追い詰めて行つた。この後、友吉の右往左往する、自分の意志も立場もはっきりしない発言が、友吉自身そうとは意識していないのに、とことん數代を追い詰めてしまう。

友吉 ……(略)……おい、數代、今云つた通り、おれも行くことになつたから、そのつもりで支度をしてくれ。
數代 (黙つて友吉の顔を見てゐる)

友吉 ……(略)……なんにも云はずに、行かしてくれ。なあ、おい、數代、辛抱してくれ。

數代 (夫の顔を見るでもなく、眼を下に落すでもなく、ぼんやり遠くの方を見つめたまゝ、黙りこくつてゐる)

茫然自失の体である。やがて數代は爆発する。

友吉 ……(略)……うちの奥さんを見ろ、奥さんを・

．．．おんなじことぢやないか。

敵代 （突然、痴高く）違ふ、違ふ、あれは女ぢやない。自分の夫が、何時歸つて来るかわからないやうな、遠い遠い處へ行くのを、平氣で見送れるやうな女が、どうして女と云へるものか。いや、いや、行つちやいや、行つちやいや．．．。

敵代 ．．．（略）．．．いえ、それより、あんたが行つてしまつたら、あたしは、すぐに死んでよ。うそぢやなくつてよ。今、こゝで死んで見せる。

敵代 ぢや、あたしが、かうしてゐるから行つて御覽なさい。
（友吉の頭に腕を巻きつける）

友吉 （女の腕と一緒に、なにかの誘惑を振り拂ふやうに起ち上がる）さ、かうしぢやをられない。

敵代 （友吉を見すゑながら）．．．（略）．．．あんたは、軍人でもなんでもないのよ。たかの知れた馬丁よ。．．．

（略）．．．うちの旦那さん見たいに、勲章を澤山つけて、長い剣を抜いて馬の上から號令をかけるんなら、戦争に行

く甲斐があるわ。あんた見たいに、貧弱な格好をして、馬の後から走つて行くだけなら戦争も糞もあつたもんぢやないわ。（間）．．．（略）．．．

この敵代の発言、岸田はどういう計算があつて、敵代にしゃべらせたのであろうか。「戦争を知らない女」を書いたのか、「世間は戦争をこゝも見ている」という世間の戦争観の一面を書いたのか。軍国主義批判はしていない。敵代の、そして少なくとも一部のまたは多くの、人間の本心を書いたものと見るべきであらう。岸田はいよいよ敵代に自分の死を口にさせる。

敵代 それぢや、どうしても行くつて云ふのね。

友吉 さうさしてくれ。若し、これで、お前がどうあつても行くなと云やあ、おれは生きぢやゑられない。（松尾注）

切り札のつもりで「生きぢやゑられない」と言った）

敵代 生きぢやゑられないつて．．．あんた、ほんとに死ぬ氣なの、あたしと一緒に死んでくれるの。

友吉 ．．．。

敵代 あんた一人に行かれちまうよりは、その方がよつぽど、あたし、うれしいわ。（間）．．．（略）．．．

ここで始めて數代は、「一緒に死ぬ」ことを思いついた。この後「あたし、どうして今迄そのことを考へなかつたのか知ら」と言っている。追いつめられた數代にとっては、この非現実的な解決策も最上のものであった。岸田は、この後、友吉の言動で、最後の揺さぶりをかける。それは、最も岸田らしいドラマツルギーである。

數代 ……(略)……行くなら行くで、機嫌よく、あたしを安心させてから行つて頂戴。行かないなら行かないで、思ひきりよく、あたしを恨まないで一緒にいて頂戴。

友吉 お前を安心させるって、どういふ風にすればいゝんだい。

數代 ……。

友吉 お前のことは決して忘れやしないよ。

數代 それだけ？

友吉 浮氣なんか、する氣遣ひはなからう。

數代 それだけ？

友吉 歸りには、うんと土産を持って來らあ。

數代 それだけ？

友吉 出来るだけ度々、便りをするよ。

數代 それだけ？(聲がだんだん小さくなる)

友吉 長くなるやうだつたら、都合をつけて早く歸つて來る

數代 それだけ？(殆ど聞こえない)

友吉 さ、そんな事を云つてないで、早く支度をしてくれ。

數代 (黙つて行李の紐を解き、服を出す)

遠くで進軍喇叭の音が聞こえる。

友吉 (着てゐる服を脱ぎはじめ)

數代 (涙を押へて) あたし、一寸、奥さんのところへ、お知らせして來るわ。すぐ來るから待つて、頂戴。(友吉の顔も見ずに、何物かの後を追ふ如く、よろめきながら出て去る)

このまま、數代は歸つて來ない。ありふれている音響効果かも知れないが、「進軍喇叭の音」は効果的である。居ても起つてもおれない、行動に移らざるを得ないような氣持ちになる。

友吉のまるで出稼ぎに行く亭主みたいな呑氣な発言に「それだけ？」を繰り返すことばと、その声がだんだん小さくなって行く変化とで、岸田は、數代の心理を表現した。そして、進軍喇叭の音。友吉が服を脱ぎはじめ。

數代は「何物かの後を追ふ如く、よろめきながら出て去る」。

覚悟の自殺ではない。「自己」を支えていた総てのものを喪失した挙げ句、逃げ場のないところまで敵代は追い詰められた。どっちかと言えば発作的な自殺が、この後に来る。

舞台上に表現された、敵代の死は

此の時、突然、よしのけたま、ましい聲が聞える。續いて、よしが、血相を變へて飛び込んで来る。一回その方に向き直る。

よし 奥さま、大變で御座います。

夫人 どうしたの。

よし (外の方を指しながら) お神さんが、あの、井戸で御座います。奥さま、井戸……。(あとは聲が出ない)

夫人 (驚いて外に走り出る)

よし (後に續く)

友吉 やりやがったな。(これもその後から走りようとするが、何を思ったのか急に部屋に飛び上がり、柱につかまつたまま、恐怖に満ちた眼を一杯に見開き、聲をふるはせながら)うそだよ、うそだよ、おれは行かないよ。行かないってばさ。えゝい、うそだつて云ふのに、これでもわらんのか……。 (殆ど狂亂の體にて、悶え叫ぶ)

幕

幕切れのせりふで、友吉には、こう言わせられたのは、昭和二年だったからか。昭和六年には、上演が困難になった(と確認出来る資料を筆者は持っていないが)、とすれば、それも、岸田の、取りようによっては軍部批判、軍国主義批判ともとれる、そしてその実、素直な人間性の表現であるせりふ(つまり岸田の考え方)によるものであろう。

このあたりの筆者の発言は、目下のところ抱るべき客観的根拠になる資料がないので、全く検証出来ない。昭和五年生れ、軍国主義教育を真正面から受けてきた筆者の、体験に基づいただけの、全くの独断的な感想であることを断っておく。

3 補遺

「動員挿話」は、現代に上演価値のある作品ではない。岸田が、時代に合せて、その上あるいは面白がってこの話題を選んだのかもしれない。何故なら軍部が強大な権力を持っていて、帝國主義、軍国主義が大手を振ってまかり通っていた当時の日本の姿勢からして、日清戦争(明治二七、二八年)、日露戦争(明治三七、三八年)は高く評価されていたから。当時の時局には、まっぴいで、話題性もある。

ただ、「話題性がある」と言ってしまうと、劇作家、演劇人

岸田國士への理解に大きな誤りを犯すことになる。劇作家、演劇人岸田は比喩的な表現を使えば右と左から、戦前戦後に指弾されている。また周囲のいろいろな立場の人たちから白眼視されてもいる。この問題は、今の時代にもう一度検証し直すことも意義なしとはしないかも知れない。

一九三七年（昭和十二年）、日中戦争が勃発して、「国民精神総動員」が叫ばれ、一九四〇年（昭和十五年）、新体制運動が叫ばれ、大政翼賛会が発足した。岸田は、大政翼賛会文化部長のポストに就いた。

戦後、岸田は、これらに関して、「戦争責任追求」の観点から言及されたこともあった。しかし戦争賛美だと単純に切り捨てるべき問題ではない。渡邊一氏は「岸田國士論」の中の「もうひとつの抵抗」の中で、「関東大震災の翌年『古い玩具』で華々しく文壇・劇壇に登場し、爾来周囲から白眼視されたとはいえ日本における演劇革命の担い手として日本の劇文学を一新したばかりか、近代日本の劇作家の中でも最も美しい日本語を駆使した岸田國士が、いかにして『高潔な帝国主義的ユマニスト』と呼ばれ、戦争責任を追求される文学者に変貌したのであったか」と述べ、さらに「ある特定の方向にむかっただけか据えられていなかった視座とはまったく別の視座に立っ

て、あらためて考えなおしてみる必要を痛感させずにはおかない」と述べておられる。この渡邊一氏の発言以来、さらに幾許かの年月を經過しているが、筆者自身は、作品、それも戯曲だけに限らず、時代の変化による岸田の考え方の変化を微妙に写していると思われる小説、例えば「由利旗江」（昭和四年、五年）、「落葉日記」（昭和十一年、十二年）等の作品も含めて検証しつつ、出来れば劇作家、作家、演劇人岸田國士の本質、姿勢、思想等を検証してみたい。もし今、岸田國士ありせば、「動員挿話」は触れてほしくない作品なのかも知れない。岸田作品の中で、「動員挿話」の位置づけも必要かもしれない。

〈参考文献〉

- 岸田國士全集 新潮社 昭和二十九年刊
新選岸田國士集 改造社 昭和五年刊
現代演劇論 岸田國士著 白水社 昭和二五年五版
岸田國士論 渡邊一民著 岩波書店 昭和五七年刊
ドラマの現代 阿部好一著 近代文藝社 昭和五八年刊
岸田國士の世界 駿河台文学会編 審美社 平成六年刊